



エーデルワイス

後輩へのメッセージ

(奨学生に贈る言葉)

2018 年卒業生

古川瑠菜(青山学院大学 教育人間科学部教育学科)

大学時代自分が何を成し遂げたいか、目標を忘れずに行動して下さい。

「自由に使える時間がたくさんあるよ」と言われていたのですが、4年間過ごしてみてもまだやりたいことがたくさんあったなと感じています。本当に成し遂げたいことは何か？常に優先順位を考え行動するよう心掛けてみてください。

好きなことを自由にできる時だからこそ”これ 1 番”を決めることは難しいかもしれません。私はやりたい事が色々ありすぎて、絞っていくことで自分の可能性を狭めてしまうのではないかと不安に思うことがありました。ただ残念ながら時間には限りがあります。好きなこと、譲れないこと、関心のあること、これは嫌だということ…など今までの自分を振り返ることで何を大切にすべきか見えてくると思います。

一方で大学時代これといってやりたいことが見つからない、やりたいことが分からなくなってしまったという人もいるかもしれません。とは言え興味のあることが一つもないという人はいないのではないのでしょうか？

そのような時私は小さなことでも思い切って飛び込んでみるのが大切だと考えています。今は各分野でイベントが開催され、たくさんのサークル・団体が存在しています。話を聞きに行くというのもやりたいことを見つけるヒントになると思います。

何か動き出してみることでやりたいことも分かってくるのではないのでしょうか。

自分のやりたいこと、好きなことを極めることで”自分の軸”も自ずと見えてくると思います。就職活動など何か大きな決断をするとき、その軸はあなたにとって大きな支えとなります。ぜひ自分自身をじっくり向きあって大学生活を過ごしてください。

ちば まさかず 千葉 晟和(慶應義塾大学 理工学部管理工学科)

「人々は悲しみを分かち合ってくれる友達さえいれば、悲しみを和らげられる」

これはシェイクスピアの言葉です。

大学生になると、行動範囲も広くなり多くの人と出会うことになると思います。戸田育英財団が毎年開催している交流会も多くの人と関わることの出来る機会の一つだと思います。多くの人と出会わなければ「悲しみを分かち合ってくれる友達」と出会うことは出来ないと思います。戸田育英財団の交流会を良い友を見つける一つのチャンスと捉えて楽しんで欲しいです。

峯岸 佑太(慶應義塾大学 経済学部)

大学の環境になじめない自分にも期待を抱いて下さる方々がいると思えると、精神的にも支えられたと感じました。

後輩の皆さんも奨学金を頂いているということは、金銭的な面で「私たちの将来に、期待を寄せて支援してくださっている」という意味であると理解しているでしょう。

しかしその期待は同時に、皆さん個人個人に特別に向けられた「期待のまなざし」でもあると思います。私たちの両親が私たちに向けてくれるそれにも似たものでもあると思います。その期待に応えられるよう私も努力していきます。

皆さんも共に、頑張りましょう。

関 真希(芝浦工業大学 工学部応用化学科)

大切だと感じたことを2つ言いたいと思います。

1つ目は、“無理をしてはいけないけど、無茶はしろ”ということです。

この言葉は私の研究室の教授がおっしゃっていたことです。

大学4年間色々忙しい時期もありましたが、睡眠時間を少し削って無茶をしてきました。多少の無茶は若いうちなら大丈夫だそうです。ぜひ、忙しいからとあきらめず何事にも挑戦してほしいと思います。

2つ目は、人の意見を否定せず、最後まで聞くことです。

私は、この行動に助けられました。4年の研究室に配属した時期、私は研究について無知でした。そんな中、「私は、こういうことですか」と尋ねると、私の意見を否定せず最後まで来てくれる人がいました。私は当たり前だけど、そういう当たり前のことをするのは難しいし、大切なことだと思いました。この行動は、意見交換を活発にさせ、いいグループをつくるし、相互理解につながる大切な行動だと思います。

この2つが私の大切だと思ったことです。良ければ実践してみてください。

山田 龍治(聖マリアンナ医科大学 医学部医学科)

自分がやりたいことを、精一杯頑張ってください。

渡邊 大介(東京大学 文学部行動文化学科社会学専修)

皆さんにおいては、是非学生のうちに様々な経験を積んでもらいたいと考えています。勉強することはとても大切ですが、それ以外にもボランティア活動や学生の自主団体などぜひ、社会的活動というものに挑戦してみてください。

探せば何かしら自分の興味を魅かれるものを見つけられるはずです。

そしてそうした活動を見つけられたなら「自分にできるだろうか」と思ってもひるまずに挑戦してみてください。

大変な思いをすることになったとしても、それを乗り越えた後には、きっと自分に対する大きな自信が出来上がっているはずです。

こうした自信は、今後皆さんが直面する困難な場面において、くじけずに前に進むための武器となり、防具となり原動力ともなり、まさに一生の宝になるでしょう。

是非自身に、自信をつけるための活動を、こうしたことをやっておけばよかったと後悔している先輩からのメッセージでした。

周防 亮介(東京音楽大学 音楽学科 器楽専攻)

今しかできないことを精一杯努力し、自分らしく前進してください。

加藤 麻稀(東洋大学 日本文学文化学科)

とにかく好きなことをやってください。

単位やレポートやテストを気にしてなかなか難しい部分もあると思いますが、自分の「やりたい」気持ちを大切に、どんどんやってみてください。

アルバイトはほどほどに。自分が無理だと感じたら辞めて次を探してください。

アルバイトであれ学生であれ、できる人、やれる人が一番すごいと私は思います。

これから先、理不尽な人や事が多くなると思いますが、すぐに誰かを頼って自分が楽になる事を優先してください。そしてどんどん外に出ることをお勧めします。意外なことが趣味になったり、やれるようになったり、面白かったりします。

将来の不安も大きいでしょうが、自分らしく全力で学生時代を楽しんで欲しいです。

瀧澤 まりこ(東洋大学 経済学部経済学科)

4年というのは長いようで、本当に短いです。嘘だと思っていた自分がこうして4年間の大学生活を終えて強く感じました。だからこそ、時間というものは本当に大切にすべきだと思います。そのため、自分が後輩の奨学生に贈りたいメッセージは“時間の使い方次第”では大きな得につながるということです。

もちろん学業を第一に頑張りましたが、アルバイトを隙間の時間で使ったり、朝の時間をいかにして読書に取り組んでみたり、休暇(長期)海外旅行(またはボランティア)してみたり、とにかくこの4年間で時間を上手く使うことによって取り組みました。

また確かに時間を上手く使うのは自分次第なのですが、そうした時間を使える環境があることを感謝することが大切だと思います。今後ますます後輩の皆様が、充実した楽しい学生生活をおくれますことを応援しております。

小泉 亮(東洋大学 経営学部マーケティング科)

大学4年間はあっという間に過ぎていきます。

学業、サークル、友人と過ごす時間…。たくさんある時間の中で自分がのめりこんで熱中できることを探してみてください。

それを見付けることが、それぞれの将来につながってくるので頑張ってください！！

森永 夏恋(明治大学 商学部商学科)

この春、社会人になる私にはまだ学生でいられる時間が残っている皆さんのことが羨ましくて仕方ありません。

学生時代、特に大学生でいられる4年間は長い人生の中でほんの一瞬のことです。平日の昼間にのんびりと電車で揺られながら登校し教授の話に耳を傾けることも、時間を気にせず図書館で目に付いた本を手に取り読みふけることも、あるいはふらりと海外への航空券を予約し来たこともない言語や見たこともない料理に出会うことも、卒業後の就職先とは全く異なる業種のアルバイトで汗を流すことも、実はもしかしたら今しか出来ないかもしれない、とても贅沢な経験です。

皆さんが、いつか学生時代のことをふと思い出した際に「幸せな時間だったな」と思えるような経験が、一つでも多くありますよう願っています。

野口 香織(立教大学 文学部文学科英米文学専修)

大学では、自分が想像している以上の挑戦する機会が用意されていると思います。なので、自分が少しでもやりたいと思ったら行動を起こしてみてください。

失敗しても、何年か経てば笑い話になるので。

小谷 春花(早稲田大学 創造理工学部建築学科)

私の学んでいる建築学は、全ての人の生活の根定や基盤に存在しており、単に建物としての形を成すだけではありませんでした。

例えば、遊牧民族にとっての住み家と洞窟に囲まれる環境の下で生活を営んでいたことは、私たちの知る「家」「建築」は形や思想よりも前に重用があるのではないのでしょうか、また、これは、近所の整体の整体師さんに言われたことなのですが「人間の体が一番理にかなった建築物である」と言われました。

これは私や、私を取り囲む同学科の人々の口からはきっと聞くことができなかった言葉でしょう。

このように、建築学専攻であることと専攻でないことの視点と領域をつなげていくことや自分の中で接点を設けることができれば豊かに広がっていくと感じます。

交流会の講演や様々な人との会話はそれを行う機会だと思います。

昨年、同じ早稲田大学の降旗一樹氏がスキーで広い世界に挑んでいました。このエピソード一つにしても、上記の話を思い返すきっかけの一つとして働くのだと考えます。

つたない文章ですが、ゴールを遠くに投げ、その分だけ経路を作り、多くのことを学ぶ機会が訪れるのだと思います。

降旗 一樹(早稲田大学 スポーツ科学部スポーツ科学科)

2017年12月に北海道で行われたアルペンスキー平昌オリンピック予選大会に出場しました。優勝者のみがオリンピックの切符を手にするこの大会で私は力及ばず28位という結果に終わりました。

優勝した選手との力の差は歴然としており、自分の無力さを痛感しました。子供の頃から憧れて、いつしか目標だったオリンピックの夢は絶たれました。この春からは気を改め、社会人として違う人生がスタートします。オリンピックを目標にスキーに打ち込んで得た経験は、これから先、私の人生できっと役に立つと思います。

「当たり前の日々を当たり前とってはいけない」

これは、私が身を持って感じた事です。いつもの様に当たり前にスキーの練習を行っていた私は、ちょっとしたミスで転倒し大怪我を負いました。

今シーズンこの復帰は不可能で来シーズン復帰できたとしても、今までの様なパフォーマンスが出来る保証は無いと言われたのです。

まだこれが治る怪我だったら良かったけれど、もし脊椎を痛めて一生歩けない体になっていたら？死んでしまっていたら？そう思いました。

だから私は「あの時ああしていれば」と悔やまないよう、悔やむことが減るよう、当たり前の事でも当たり前と思わず日々を送っていきたいと思います。

高村 理沙(早稲田大学大学院 先進理工学研究科)

学生の中に、色々な事に挑戦し色々な経験をして欲しいと思います。

高校までの皆と足並みを揃えて進む時とは大きく変わり、それぞれが自らの選択で違った道を歩き始めるのが大学で重要なことだと思います。

自分だけの経験を積み、挑戦が当たり前になってくると、次は挑戦から得られる成果を求めるようになり、次の世界が開けると思います。

このように自分らしさを見つけることは、多様性の高いこれからの時代にとっても大事であり各々に個人の軸を持って社会に出て欲しいなと願っています。

懇親会等で会えるのを楽しみにしています。

坂本 雄紀(立命館大学 理工学部電気電子工学科)

・言葉に対する大切さ

奨学生の皆様にも、大切な人がいるかと思っています。家族や友人、数えられないほどいるかと思いますが、感謝の気持ちは伝えているでしょうか。

「ありがとう」は何気ない一言かと思いますが、大切な言葉です。思っているだけでは伝わりません。口に出して初めて意味が生まれると思います。感謝の言葉は人と人をつなぎます。是非とも奨学生の皆様も、恥ずかしくせずに伝えてみてください。